

千葉市 オーラルヒストリー

～記憶で辿る千葉市の輝き～

【寒川神社氏子青年会 編】



寒川の御浜下り

800年の歴史とその再興

寒川神社氏子青年会 鈴木 年樹氏

中世にまで遡る由緒ある起源を持ちながら、昭和30年代の埋め立てによって途絶えてしまった寒川神社の神事・御浜下り。その復活までの道のりを、寒川神社氏子青年会の鈴木年樹さんに伺いました。



鈴木 年樹氏

——鈴木さんと氏子青年会との関わりについて教えてください。

昔は各町会の青年会が寒川神社さむがわに集まっていたいろいろなお手伝いをしていたんですけど、高齢化で各町会から青年会がなくなりつつあった頃、先生（先代の寒川神社宮司）が私の家に来て、「青年会に入ってほしい」と言われました。大学卒業後すぐのことで、それから丸30年経ちましたね。

声をかけられたのは、もともと寒川神社の祭りが好きで、親子そろって毎年参加していたからでしょう。寒川では祭りのことを「まち」というんですけど、夏が近づいてくると、父親が「去年の“まち”はさあ……」とか「昔、“御浜”でよお……」なんて話し始めるんですよ。そういう風に育ちましたから、子どもながらに祭りの真似ごとをして遊んだりしていました。祭りが終わるとガツクリ。わが家のカレンダーは祭りの日を中心に回っていましたね。

寒川神社は、家から歩いて5分ぐらいのところ、夏にお化け屋敷をやったりして、子どもの遊び場としてもちょうどいい場所だったんです。それが区画整理で縮小されて、参道は奥行きがなくなり、以前の鎮守の杜みたいな風情は見る影もありません。

自分以外にも青年会を長く続けている人たちがいますけど、皆、祭りに取り憑かれたような気持ちと、勢いの衰えてくる神社を「何とかして守りたい」という使命感とに駆り立てられているような感じです。

——氏子青年会の構成、活動について教えてください。



現在の寒川神社。創建は不詳。一説には延喜式内社の寒川神社と言われ、古く神明神社または伊勢明神と呼ばれた寒川地区の総鎮守

の休みを取って集まっていますね。

——「御浜下り^{おはまお}」とは、どのような神事ですか。

御浜下りは、毎年8月20日の例祭の日に神輿を海の中に担ぎ入れる神事です。

寒川一帯は漁師町で、この辺りで信仰されている妙見様^{みょうけん}が海に入ることで、漁に恵まれると伝えられています。盗まれて田んぼに埋められていた妙見菩薩様を海の水で洗ったという伝承もあって、これが御浜下りで3回繰り返して海と浜を出たり入ったりすることや、揺すつては上に差し上げるような神輿の動かし方と関係があるのかもしれませんが。

神輿は朝早くに宮出しされて、威勢よく市中を練り歩きます。夕方になると浜に出て、辺りが薄暗くなる頃、神輿が海に入るといふ流れです。その後、再び神輿を担いで神社に戻り、宮入りするところまで祭りは続きます。さらに、海から上がってベタベタした体と、中まで砂浜の砂だらけになった足袋のまま後片づけしなきゃなりません。でも、それからようやく社務所に上がって、豆腐をつまみに一杯やりながら、「いい「まち」だったね」って、皆で言い合う時が最高にうれしいです。

例えば、初詣での参拝客の接待とか、節分祭や七五三の手伝いとか。普段はスーツを着ている人が、作業着のつなぎを着てしめ縄を作ったり、泥だらけになってテントを片付けたり。なかなか全員がそろうことはないのですが、それでも8月の例祭には仕事

写真じゃ伝わらないけど、御浜下りには何ともいえない神々しさがあります。浜辺の向こうに富士山が見えて、いい風が吹いてね。だんだん暗くなっていく中、神輿が海に入っていく。そこに



千葉ポートタワーの砂浜から海に入っていく（2016年）



夕日に照らされる御浜下りの海辺は神々しい雰囲気満ちている（2015年）

神様がいるような感じがして鳥肌が立つんです。そんな一瞬を感じたくて、毎年やりたくなってしまうんじゃないかと思っていますね。

——昔の様子について、どのようにお聞きになっていますか。

御浜下りは中世の絵巻物にも描かれている由緒ある風物です。以前は、出洲海岸にある大鳥居をくぐって神輿を海に担ぎ入れていたそうなのですが、その海岸が昭和30年代に埋め立てられ、海に入ることができなくなってしまいました。青年会でも、役員たちは昔の御浜下りを知っていますが、私くらいの年齢だと見たことがなくて、父親なんか話す逸話を聞くばかりでした。小さい

頃からくり返し聞かされたのは、例えばこんな話です。

寒川神社が戦後に新調した神輿は、あんまり大きいので「お化け神輿」と呼ばれていました。祭りの日、旧道を「やつしややつしや」と担いで運んでいたのですが、Uターンしようと向きを変えた時、両脇の家にぶつかってしまったそうです。担ぐ棒が長すぎました。突っかかってしまっ、どうしても向きが変えられない。じゃあどうしたか。棒を詰めたかというところ、棒のこちら側の家にあつた戸袋と、反対側のお風呂屋さんの塀を外して、やつと向きを変えたんだとか。神輿の方を切るという発想はないんですね（笑）。

ほかに、今だったら大事件だよとか、それ警察沙汰でしょ、みたいな話もあったりして。それでも、祭りだからっていうんで、当時はそれで収まっちゃったんだよとかいう話を、もうお決まりのように毎晩聞かされるわけです。夕飯時には、笑いが絶えなかったですね。

そうするとやっぱり、この地域にそういう元気を取り戻せないかとか、御浜下りを見てみたいって、子どもながらに思っていました。

——御浜下りは、平成12年に氏子青年会の皆さんにより、約40年ぶりに復活したと伺っています。そのいきさつを教えてください。

海岸が埋め立てられて浜がなくなると、御浜下りはできなく

なって、代わりに出洲港から台船（荷物の運搬などに使われる平らな浮き船）を出して、そこに神輿や太鼓を乗せてお囃子をするという神事をしていました。台船をタグボート（引き船）で引つ張って、千葉港を一周して帰ってくるんです。だけど、工場地帯を船で回ってるだけだから、住人はそんなことをやっているとは気付かない。神社の役員ぐらいしか知らないような神事をずっと続けていました。なぜかといったら、神社としては、とにかく神様を海に入れなきゃならないからなんです。

この頃は、寒川から御浜下りの「御浜」という言葉がすっかり消えてしまっていました。自分としては、声をかけてもらった時から「もう1回、「御浜」をやりたい」と先生に話して、その復活を目的に青年会に入ったようなものでしたから、集まる機会があるたびに「御浜」の話をするようにしていたんです。そうすると、「そういえば、うちの爺さんから聞いたんだけど」「うちの父親がこんなこと言ってたよ」と、「御浜」の話が断片的だけど出てくるようになって。そのうちに気分が盛り上がってきて、だんだんみんなも実際に見たくなったんじゃないですかね。実現した時には、寒川の至る所で「御浜」という言葉が復活していました。

——御浜下り復活までのご苦労などがあれば伺えますか。

そもそも先生は大らかで人柄が良くて、ほかの神社の氏子たちに羨ましがられるくらいなんです。復活させるのに、そういう意

味での難しさがなかったのには救われました。神社の役員たちも賛同してくれましたしね。先生は、先祖代々、千年近く妙見様をお守りしてきた一族の末裔なんですよ。

千葉ポートパークの以前はカミソリ護岸だったところに人工の砂浜ができて、あそこならできるかもという期待が高まりました。一番気を遣ったのは、再開する際、少しずつ慣らししていくようにしたことです。実は近年、寒川から祭りに参加する人が減っていて、神輿同好会から担ぎ手を募っていたんですね。昔みたいに、神輿を担ぎ慣れていて、気心も知れている仲間ばかりというわけではありませんから、神輿を水中に沈めてしまおうとか、思いがけないことが起こらないように、慎重に進めました。

——復活を実現された時は、うれしかったでしょうね。

初めて神輿が海に入った時、昔の御浜下りを知っている役員は皆、泣いていました。涙を流して本当に泣いていましたね。担ぎ手は半纏はんてんを着ていますが、役員たちは、時代劇で殿様が身に着けているような袴かみしもなんですよ。それで神輿のお供をして回るんですが、感極まって、その袴のまま海に入っちゃっていました。

海から上がって、神輿を担いで神社に戻るんですが、神社に神輿を納める時になってまた自然と涙が流れてきて、「神様が近くにいるんじゃないか」と、口々に言っていました。不思議な充足感がありましたね。

——平成21（2009）年に、千葉市地域無形文化財に認定されたときのお気持ちを教えてください。

自分たちの楽しみのために始めたことでしたが、文化財に認定されたことで、「御浜下りは千葉市の財産」だと改めて気付かされました。お墨付きをもらったみたいでうれしかったです。

確かにこれは、千葉市にとって大事な行事ですよ。令和4（2022）年放映のNHK大河ドラマ『鎌倉殿の13人』にも出てくる房総の武将・千葉常胤^{つねたね}は、鎌倉幕府を開いた源頼朝から父と呼ばれて慕われたという人物です。1180年のこと、常胤は、戦に敗れて船で逃げてきた源頼朝を助けて信頼されました。常胤



威勢よく寒川の街中を練り歩く神輿（2016年）

は千葉一族の中興の祖とされており、その孫・成胤^{なりたね}が出洲港で敵の大將を生け捕りにしたことを記念して、御浜下りが始められたと言われています。

その後800年間、たとえ貧しく寂れようとも、寒川の住民はこの行事を頑なに守り続けてきたんですね。でも、その起源を考えると、御浜下りは、千葉家と千葉町というブランドの誕生に大きく貢献した、

千葉市民みんなの祝い事と言っているのではないのでしょうか。

千葉市の文化財ということなら、もっと堂々と胸を張って、あちこちに出向いて「大事なものだから守っていこうよ」と呼びかけてもいいのだと、後押ししてもらっているような気がしています。

——新型コロナウイルス感染拡大防止のため活動が制限されていると思いますが、今後の抱負についてお聞かせください。

今年は結局、神輿は出さずに各町内を回り、形だけ海に入って神事を行いました。青年会も活動できませんが、これをいい機会と捉えて、次に向けての準備に充てようと、新しいことに時間を割いています。

具体的には、JFEスチール株式会社さんが地域の活性化にとっても力を入れていて、千葉大学の学生と産官学連携を試みているんですね。寒川の御浜下りも産官学連携できないかと相談したら、すぐに市長を紹介してくれて。現在、千葉市を含めた連携に向けて動き出しています。

直近では、千葉中央駅の前の新宿公園にお仮屋を建てて神輿を置き、露店を出したりするイベントを企画中です。今は駅の西口周辺にマンションがたくさん建っていますが、あの辺りは実は、寒川神社の氏子地域なんです。担ぎ手が着る半纏も販売する予定です。半纏を持っていれば担ぎ手として参加してもらえます。こういう取り組みによって、サポーターのような感覚で、より多

くの人に参加したり支援したりしてもらえるようになればと思っています。

こうした活動を円滑に進めるために、宗教団体の下部組織に当たる青年会にはそれなりの制約があるということで、そこから切り離れた協議会のような非営利組織を立ち上げました。市民の啓発や協賛金の募集、それから小学校に出前授業に行くなど、子どもたちに参加してもらえよう活動をしていきます。

——復活して20年が過ぎ、改めて感じる活動への想い、御浜下りの魅力とは何でしょうか。

御浜下りを復活させたかったのは、「誇りを取り戻したい」からでした。寒川に生まれた人って、それをコンプレックスにしながら暮らしているんじゃないかと思うんですよ。自分はそうでした。仲のいい同級生は子どもの頃、「線路の向こう側には行くな」と親に言われてたらしいです。向こうは漁師町で貧しくて、火事やら喧嘩やらが絶えないからと。自分でも、川向こうのきれいな家並みに比べて、橋のこっち側はスクラップ場や廃屋ばかりだなと感じていました。

今でも、うなぎの寝床みたいな長屋が多いし、区画が狭いから、そこに新しく家を建て直すこともできないっていうので、寒川の外に出て家を建てる人が多い。だから空き地だらけです。

こんな寒川でも、祭りの話を聞くと、威勢のいい神輿の担ぎっ

ぷりとか、実はすごい由緒があるんだとか、昔の生き生きした様子が目に浮かぶようで、何だか誇らしく思えました。だから、誇りを取り戻すためには、その輝かしい御浜下りを皆でもう一度やることだ、って思ったんです。

そうすれば、千葉に住んでいる人も前よりもうちょっとだけ、「千葉はいい街だよ」って言いたくなるんじゃないかなと。そのためにも活動を続けていきたいと思っています。

復活して終わりではなくて、毎年続けてきた寒川の住民は、底力があって本当にすごいなと思います。“御浜”が未来永劫続きますように。

千葉市オーラルヒストリー

寒川神社氏子青年会 編

発行／千葉市中央図書館

発行日／令和4年3月31日

取材日／令和3年11月16日

資料提供／寒川神社氏子青年会、千葉市立郷土博物館、
相馬妙見歓喜寺

(表紙：千葉神社、三代王神社神楽連、千葉市を美しくする会、
検見川神社神楽囃子連、登戸神楽囃子連、加曽利貝塚ガイドの会)



御浜下りの由来は中世に遡ると伝えられており、『千葉妙見大縁起絵巻』や『千学集抜粋』などにも千葉妙見（現千葉神社）の祭礼の中で「御浜下り」が執り行われていたことが記されている。当時の祭礼は千葉町と寒川村の一体的な祭りで、「千葉舟」と「結城舟（別名寒川舟）」という舟形の山車を曳き出すなど、大規模に行われていた。この祭りは江戸時代の記録にも度々登場し、二基の「大舟」の上では神楽が奉納されたといわれる。写真は江戸時代の妙見祭を描いたもので、左の舟が結城舟、右の舟が千葉舟。「下総国千葉郷妙見寺大縁起絵巻」より（福島県・相馬妙見歓喜寺蔵・非公開）



「大舟の飾り幕」。結城舟の側面に飾られていた幕で、嘉永3(1850)年に新調されたもの。長さ約15m、幅78～79cmあり、船首に当たる部分には、千葉氏の家紋「月星」と「九曜紋」が飾られている。この幕の裏には寄進に携わった氏子の名と、この幕を寄進するために氏子が「1日1銭を蓄えた」という由緒などが記されており、当時の氏子の祭礼にかける思い入れを伺うことができるという（写真／千葉市立郷土博物館提供）



あまりの大きさに「お化け神輿」と言われた初代神輿に代わり新調された、先代の神輿（千葉市立郷土博物館蔵）



海が埋め立てられる前に行われていた御浜下りの様子。海の中に鳥居が建っている



千葉市蘇我スポーツ公園で開催される秋の恒例行事、JFE ちばまつりに参加（2016年10月23日）